

「ミツバチは暗いところでなければ蜜をつくらない。同じように人間も沈黙しているときしかアイデア（思想）は湧かない。」と言った人がいる。思わず、うなずいてしまう。

かつての日本では、「修養」という言葉が、人々の間で盛んに交わされていたそうである。「修養とは、自らをよりよくしようとする心の胎動である」と言う人もいる。非常な不運に遭えば、偉い人でも、かなりの衝撃を受けるかもしれない。それでも、しっかりとそれを受け止める心構えが必要である。反対に、何でもない順境のときには、いざというときのことを思って何が来ても大丈夫のように心を練っておくことが大切である。これが、修養というものの勘どころである。

修養は、やってもやらなくても、普段はあまり変わらない。いいご馳走を食べさせた羊と、普通の羊とでは、見た目は変わりはない。ところが、いざ肉にしてみる、毛を刈ってみると、その差は歴然としている。いいご馳走を食べた羊の肉は美味しい、毛の質もいい。人間も同じである。その人の価値は、ちょっと見ではわからない。いざというときを見なければわからない。

スポーツの指導者の中には、以前は勝っていた、結果を残していたのに勝てなくなったという方がいるだろう。そのまま、勝てないままにいる方がいる。その一方で、再び勝てるようになる方もいる。その多くは、指導を変えて成功している。今までの指導では、もはや通用しない。では、どうするか。練習量を増やすわけではない。指導者自身が、自分を変えている。自分を変えることができた人が結果を残している。その過程には、修養が存在している。

では、学校の先生方はどうであろうか。世の中が変わり、子どもたちが変わり、今までの指導では、うまくいかなくなってきた。自分自身を変えているだろうか。変えるための努力をしているだろうか。指導が通じないのは、子どもがわるいと思うのは簡単である。だが、そう思っている以上、何も変わらない。うまくいかないのは、自分に原因があると思うようにならないと、何も変わらない。

自分が変わろうとするとき、専門的な知識や技能は、もちろん必要だが、それ以上に大切なのは、修養ではなかろうか。自らをよりよくしようとする心である。先生方の研修会というものがある。その多くは、研究の方にシフトしている。修養のための研修会は決して多くはない。

先生方からすると、修養と言われてもピンとこないであろう。必要性を感じないだろう。修養は、やってもやらなくても、普段はあまり変わらない。見た目では、修養を積んでいるかどうかの判断はむずかしい。だが、いざというときに、明らかな違いが出る。先生方は、このいざというときに弱くなっているのではなかろうか。今一度、自分の目の前で起きていることの原因が自分にあることに目を向けなければならない。そうすると、いろいろなことが変わってくるはずである。